

藤井裕久民主党名誉顧問に聞く4

二〇一四年一月二一日（火）

港区白金台の事務所にて

聞き手

尾崎美千生 元毎日新聞政治部副部長 高連協参与

堀内正範 朝日新聞社社友 「月刊丈風」編集人

政界の激動を前にした一昨年一〇月四日に、衆議院第一議員会館九一九室にお訪ねした。一二月一六日の総選挙で民主党は大敗、藤井先生は勇退されたため、昨年一月一八日には雪の残る細道をたどって白金台の事務所にお訪ねした。その後、民主党は七月二一日の参院選にも敗れた。この間にすぐれた見識をもつ高齢議員が引退し、「高齢社会」達成にとつては逆流となっている。

ふたつの国政選挙に勝った自民党は、安倍首相のもとで「脱デフレ脱却」のための「異次元の金融緩和」に着手し推進している。オリンピック招致の風を受けて飛距離をのばし、安倍首相は「一年一相」のK点を越えたものの、「消費税増税」を前にしたアベノミクス経済の陰り、歴史観による国際的孤立、そこに降ってわいた二〇一四年初の「都知事選」への細川護熙元首相の立候補（「原発ゼロ」を掲げて小泉元首相の支援を受けて）。ここは藤井先生のご指南を受けるべく、昨年八月二三日以来、半年ぶりにお訪ねした。

◎都知事選を前にして

尾崎…ごぶさたしています。昨年の年初は雪で。

藤井…そのあとここでやったよね。わたしの会の前に。

堀内…はい。九月一六日の「叙勲受章祝賀会」の前、八月にお訪ねしました。民主党政権だったころ議員会館に、次が雪の白金台、そして前回はお祝いの会の前、夏でした。たしか当日は風雨がつよくなって。

藤井…お蔭さまで満員でした。マスコミ代表は海老ちゃん（海老沢勝二・元NHK会長）で、この年代が中心で、あと現役の若い連中までできてくれました。ところで今日は何の。雑談でいいのでしょうか。

尾崎…まずは都知事選のことです。

藤井…TVで話しましたよ。

尾崎…朝のTBSですね。

藤井…ええ。結論としては、ワンテーマはおかしい。でも「原発」をやっているといけないというのはほとんどない。経済政策だってやっている。東京都民一三〇〇万人に対してはあたりまえ、という話がひとつ。それから細川については、「佐川」の話ですか、あれは野党として野中（広務）とか深谷（隆司）が予算委員会で行ったこと。そんなことをやるとまた舛添（要一）は女性の話になっちゃう。選挙がそんなものであるのはおかしいと思いました。

尾崎…お相手はだれだったのですか。

藤井…片山善博。これはまっとうですよ。

尾崎…都知事選の候補ですが、先生は細川担ぎ出しにはひと役買ったのですか。

藤井…関係していません。が、細川から電話がありました。応援してくれとは一言もいけません。どういふことかという、野中に正確な話をさせてほしいと言われました。正確な話つまり野中だってあんなのはウソだと思っているのですよ。下が何をやったかは知らないけれど、本人には関係なかったことは野中も深谷も知っています。わたしは大蔵大臣だったのですから。野中も深谷も自民党が野党だから予算委員会でがんがんやりましたよ。

尾崎…深谷というのは東京二区のもの。

藤井…佐川のことは野党の野中と深谷にやられたのです。当時からぼくは細川は知らないと見ています。この話をやると逆に舛添の女性の話が出てきます。片山さつきだけじゃない。そういうことは両方やめろと言っているのです。

堀内…そんな時期じゃない。

藤井…選挙になるとみんなそれなんです。「女性かカネ」の話になる。なさない。

尾崎…細川さんにも女性の話が。

藤井…ありませんよ。

◎細川さんには癖がある

藤井…ただ細川にはバカくさい癖があるのです。このほうが問題です。佐川のバカな問題で辞めることになった。「G7」でワシントンへいく直前に、辞めちゃダメですよ、こ

んなことで辞める必要はまったくない。支持率七〇%だった。いまの安倍よりはるかに高いのですから。「わかってます」というんです。ワシントンにいる間に「辞めた」ということになった。あの人の問題はそのことです。「権力に恬淡としすぎる」ということ。「恬淡としすぎる」のは権力者としてはいけないということ。「あれがきれいでいい」というふたつの評価に割れる。ほかの話はろくでもない話ですよ。

堀内…あそこで辞めるというのは。

藤井…それはあなたの意見だ。実に恬淡としているという意見がある。七〇%の支持率があるのに辞めるというのは権力者としてはおかしいという意見。そのどっちか。

尾崎…この前おたずねしたときに、「高齢化」の話をわかってもらえる人として、細川さんの名前が出た。そういうプランは。

藤井…あります。かれは日本新党ですから。勝手連かなにか知らないが、党の連中は支持すると思うよといいました。いまの尾崎さんの話ですが、これは野田しかいない。マスコミではあれこれいっています。日本のリーダーになりうるのは「これしかいない」と細川は明確にいましたよ。これは意気投合しました。

堀内…野田さんは途中下車で、これからまた。

藤井…もちろんですよ。前に話したが、大平さんところの森田君、彼としては言いにくいけれど「絶対彼だ」という。解散のあととも党を越えていっしょにやれるのは野田だとい

う声はある。

堀内…いまの安倍政権は独善的すぎて、「靖国参拝」では菅官房長官からいわれたりしている。

藤井…もう限界です。安倍は自民党でない、ネオナチです。自民党の先輩は泣いている。自民党はカネで悪いことをやったらけれど平和は守ったというのが本流です。ぼくはもともと自民党ですから。

尾崎…細川の応援はおやりになりますか。

藤井…担ぎ出しはやっておりませんが、応援はします。勝手連とか何とか、ひとりとして。友達としてこれは多いです。

尾崎…近衛（文麿）さんの優柔不断もいわれていますが。母方のおじいさんでしょ。

藤井…ぼくは近衛は嫌いです。迎合主義ですよ。昭和の政治軍人に迎合した。昭和の政治軍人は悪のかたまり。テレビでもいいましたが、日本のためになると思って死んだ若い人たちには尊崇の念を持っています。どうしてこいつらにお参りしなければいけないのか。昭和の政治軍人は絶対に許さん。二〇〇〇年の歴史にただ一回、許せないことをした。三〇〇何万人の無辜の民を殺したではないか。それに迎合した人物だと思って嫌いです。

尾崎…こんどの相手方は舛添ですか。

藤井…そうでしょう。田母神（俊雄）なんてのも出ていますが。石原慎太郎が応援しているのはおかしいと思っっています。「維新の会」も応援しないでしょう。それでもある程

度の票は出ます。東條の孫娘（由布子）が何万票が出たでしょう。日本にも数%はいます。ドイツにはネオナチが割はいます。しかしそれ以上は増えない。このグループはいます。

堀内…それが見える選挙になりますね。

藤井…そうですね。東條英機の孫娘と同じことになる。東條英機の息子（輝雄）は偉いですよ。民間のYS11をつくった人ですから。

尾崎…あれは木村（秀政）さんではなかったですか。

藤井…木村さんは設計者でしょ。三菱重工の担当部長のとき折衝したことがあります。のち自動車にきました。YS11という民間航空機をやった人で。おやじは悪いことをやったけれど、民間の経済をやった東條の息子は好きですよ。おやじは大嫌い。まわりでみんな死んでいるのですから。

堀内…安倍さんはそれをわかっていながら、やる。

藤井…わかっていてやるということは、安倍晋三という男は自民党でないということですよ。共産党から呼ばれたので行って話したことは、共産党の先輩も泣いているだろうが、自民党の尊敬する先輩も泣いている。あれはネオナチですよ、国家観が違います。ぼくとも自民党の先輩とも国家観が違います。

堀内…何が支えになっっているのでしょうか。

藤井…それはじいさん（父方は安倍寛、母方は岸信介）とオフクロ（洋子）ですね。お話したと思いますが、おやじ

の安倍晋太郎は夜中にうちに帰らなかった。竹下（登）さんにいわせれば家が嫌いなんだ、家庭の雰囲気だ。安倍晋太郎の親父は安倍寛でしょ。安倍寛は反東條ですよ。昭和七年の翼賛選挙で、かれは反翼賛ですから。鳩山一郎とか河野一郎とか二階堂進とか大野伴睦とか。こういう連中のグループでしたから。全然違うのです。

尾崎…細川の相手の舛添はどうでしょう。自民党と公明党が支援している。

藤井…公明党はほんとにそうかな。舛添は安倍的なことはいいさんからね。政策論からいうと福祉であり災害救済でありで。

堀内…乗りやすい。

藤井…たしかに乗りやすいのだと思います。ただし安倍については表に出るなら経済だけにしてくれと菅（官房長官）はいうと思います。

堀内…勝つか負けるかで大事な選挙になりましたですね。藤井…大事な選挙ですよ。片山善博はこういうことをいいました。知事選は一自治体の選挙というのが都知事選は違う。影響力の大きな選挙だから原発もいいし経済もいい。これはいわなかったけれど、ああいう歴史観と戦うことも必要。堀内…細川陣営は一月二二日に政策発表をするといっています。

藤井…逃げているといわれる。ワンパターンなんだね。そこが彼の欠陥です。一生懸命にやっているのでしょうけれど。災害救助、大島の災害とかそれなりにいわなければ。

堀内…オリンピックも。

藤井…オリンピックはどうでもいいですけど。全国の調査だとオリンピックのほうが原発より上となる。これは全国の調査だとNHKはしていました。東京都民の関心は一位に福祉でしょ、二位に原発で、そのあとの方にオリンピックです。

堀内…それはいわないと公平な報道でない。

尾崎…藤井先生のご意見は原発だけではなしに、いろいろやれと。

藤井…経済問題もそう。あんな金融政策ではかならずインフレになる。

尾崎…そのへんは細川には自信があるのですか。

藤井…まわりの者に言わせればいいのですよ。

尾崎…われわれは少子・高齢化をやっているのですが。

藤井…これは大事です。国内の経済を安定させるのは、少子・高齢化と雇用です。あんな三割しか払っていない法人税をまけるなんてとんでもない。いま尾崎さんたちがやっている少子・高齢化と雇用が国内市場を安定させる。「安定」といったのは公明党だけです。これはほめてやりたい。安倍もうちの党の者も景気のいいことばかりいう。いまは安定。

尾崎…少子・高齢化対策もこれまでの成長路線を安定化させるための道具になりませんか。

藤井…そのとおりです。

堀内…先生はどこかで「成熟社会」といっておられた。

藤井…それです。いまのやつは量より質というけれど。
尾崎…二〇六〇年には総人口が八六七四（やむなし）万人になるといふ。だからあんまり成長路線だけで考えてもいけない。

藤井…成長の根っこは安定ですね。安定なくして成長はありえない。おっしゃるとおり「成熟社会」です。まだ「高度成長」をいつている。いまさら池田内閣になるつもりか。三〇〇時間のサービス超勤をやった。それではだめですよ。何百時間も超勤をやるような社会をつくってはいけません。それが少子・高齢化対策と雇用の安定だと言っているのです。

堀内…これは世界が見ていますね、日本が何をしようとしているか。

藤井…見ていますよ。すべて安倍はだめなんです。

尾崎…日本の最適な人口は、前提条件によって違いますが、少子化が進むことを頭にいかねなければならないのです。

藤井…戦前のように産んだらカネをやるというのではだめ。子どものことは自分の問題なんです。産んだらカネでなくて、社会が安定するかどうかを判断してもらえばいい。

堀内…それは少子化も高齢化も同じですね。

藤井…そうです。

尾崎…文化庁長官をやった河合隼雄さんなどは、日本の人口は八〇〇万くらいでいいと言っていましたね。英国やフランス、ドイツなど西欧先進国も人口は六〇〇〇万から

八〇〇〇万人ですからね。

藤井…ぼくもそう思います。中国にGDPで負けたなんていうのはバカじゃないか、西ドイツに勝ったのが昭和四三年、そのころに日本の高度成長の力は限界を迎えていました。成熟社会へはいった。中国だっていずれ成熟社会へはいるのです。一三億と一億ですから。伸びが目立つのは当たり前です。

◎「平和な高齢社会」を争点に

尾崎…高齢化の問題はほかにはどうですか。

堀内…いまのお話の「成熟」ということばに籠められているのですが、安倍さんの演説をいろいろ聞いていて、女性と若い人の成長力しかいわない。高齢者三二〇〇万人の潜在力を使わなければ「成熟社会」なんかできるわけがない。そこをいわない。ヨーロッパの学者は知っている。いずれ化けの皮が剥がれるという人もいる。

藤井…そうだと思います。経験を大事にしない社会はだめだと思えます。それは安倍という特殊な人間のせいだとわたしは言いますよ。

堀内…靖国はとくにそうですね。戦前の歴史から学ぶべきものを間違っている。

藤井…テレビでもいいましたが、それでも「靖国参拝」の支持率が落ちないのは、戦争を知らない二〇歳代の支持が高いのです。悪いヤツが合祀されていることがわからない。高齢世代はけっしてウンとはいっていない。片山善博も勉

強させましようといっていました。

堀内…国連でも中国の国連大使は、戦争犯罪者を罰しない日本はこのままいくと同じ過ちをすると訴えている。これは欧米では説得力があります。長くなると、韓国の従軍慰安婦の像をあちこちに建てられる。

藤井…早く首にしないといけない。経済インフレのほうが早いでしょうが、歴史観の間違っていることについても。今年中に下ろそうということ。円安インフレが見えています。バブルの影響が二〇年つづいて、またきます。

堀内…もう見えていますね。こわいのはそういう状況が出てきたときに、どう混乱を回避するか、どう人災を避けるかがわかっていない。

藤井…かならずそうなってしまう。バブルの継続になってしまうが、それはしょうがない。国民が選んだのだから。それでもわたしは命がけで反対しますよ。

堀内…尾崎さんと話してきたのですが、都知事選で細川候補に「原発ゼロ」とともに「平和な長寿社会」の達成を訴えてほしいのですが、だれに言ったらいいですか。

藤井…わかりません。が、おっさんにはその余力がありませんから回りから。田中秀征（選対）でもいいが、勝手連で若いヤツが出ていく。日本新党だから。その問題は細川がいちばん信頼している野田にやらせましよう。野田ひとりです。

堀内…理解されれば高齢者都民の票の動きが変わります。他候補には絶対いかなない。

尾崎…この前、千葉で野田さんの講演会があって、藤井さんのところへお邪魔していますよといったら、先生にはずいぶんお世話になっていて、といっていました。

藤井…野田はいい、自民党のヤツでもそういう。いまの話はうかがいました。野田にいわせます。「消費税」といわずに「少子・高齢社会対策」。

堀内…ありがとうございます。高齢者が生き生き暮らしていける東京にしてほしい。

尾崎…細川の支援にはいろいろな支持者が声をあげる。梅原猛さんなんかも。

藤井…いますよ。文化は本人がやれる。

堀内…文化は大事。文化で理解しあえるのは、いまはフランスと日本くらいですが。

藤井…文化は野田にやらせなくとも、自分でやれる。野田にはいまのような「成熟社会」の話をいわせましよう。

堀内…それはぜひお願いいたします。

◎岩見隆夫記者が亡くなる

尾崎…先生、近現代史の話をしたいのですが。藤井先生主催の近現代史研究会の講師を務めた岩見（隆夫）さんが一月一八日に亡くなって、尊敬していた先輩として残念で。切り抜きをもってきたのですが。

藤井…御社の先輩でしたね。

尾崎…二年ばかり先輩で。

堀内…そのことで、岩見さんが『サンデー毎日』に連載し

ていた「岩見隆夫のサンデー時評」で書いていつてくれた中に、「国会議員は低齡化しているぞ」というのがあります。衆議院四八〇人のうち、老・壮・青の比率を二・六・二が好ましいといい、いま全体で老二三人は少なすぎるという意見です。

藤井…老壮青ですな。いくつから老人というのですか。

堀内…七〇歳からです。一〇年前は六九人いた。二三人まで減らしてしまつては、しっかりした政治が成り立つわけがない。

藤井…若い人間、若い人間といった時代があるんですよ。

尾崎…中曽根さんと宮澤さんが辞めさせられた。

堀内…それが二〇〇三年です。岩見さんは「切り捨て事件」といつています。

藤井…事件といつていますか。

堀内…はい。事件です。おふたりともご不満でした。岩見さんは「政治テロ」とまでいつています。政界でこんなことをやつていて、「高齢社会」の構想ができるわけがない。

藤井…経験というのは要因として何物にも代えがたい。

堀内…あのころ対外的に持つていた宮澤さんの経験は、高齡を理由に年齡で切つてしまえるものではない。

藤井…それは岩見さんのおっしゃるとおり。

堀内…そのとき最高齡の奥野（誠亮）さんは九〇歳。藤井さんも、石原さんだつてやつと八〇で、及ばない。こういう方々がクォータ制でも二割はいないと正常とはいえない。女性もそうですが。今度の選挙では、藤井さんも含ま

れています。福田（康夫）さん、武部（勤）さん、古賀（誠）さん、渡部（恒三）さん、森（喜朗）さん、止める側のヒトがない。

尾崎…森さんは同い年だから七六歳。

藤井…対談したときに森さんも同じことをいつていた。若い人からすれば早くいなくなれ。止めるヒトはいない。

堀内…新人が多すぎる。一八〇人。

藤井…小泉チルドレン、小沢ガールズ。ごろごろ入つてきたけれど、次には一〇〇人は落ちるよと森さんもいつていた。

尾崎…それは『サンデー毎日』ね。

堀内…『サンデー毎日』の「岩見隆夫のサンデー時評」。

藤井…岩見さんは病院でも書いておられた。

尾崎…藤井先生のところにも現われていましたか。

藤井…それはよく来てました。「産経新聞」に年末（一二月二七日付）に書きましたが、安倍首相の叔父さんの西村正雄・元興銀頭取が亡くなるまで政治姿勢を心配して、「市場原理主義者や偏狭なナショナリストと絶縁し、もっと経験を積むように」と伝えていたことが手紙に記されていました。前に首相になるときでしたが、岩見さんがこの手紙を「原文のまま」として引用したことがある。西村が死んですぐのことでしたが、岩見さんはどうどうと書いてくれました。かれと呑んだときに、その手紙をみせろというんです。ここへ来ましたよ。朝の七時ころ。渡したら「原文のまま」で引用して書いてくれた。

尾崎…二階堂さんのオフレコ記事を一面に載せたことがある。政治家と新聞記者の間には微妙な関係もあるが「あいつに書かれたらしようがない」という関係にまでいけば理想的でしょう。岩見さんにはそういうところがあつた。

堀内…安倍さんは叔父にそこまでいわれても変わらない。藤井…叔父として、そう書いてきているのですから、本人に言っていますよ。あいかわらず原理主義者。

尾崎…参議院の改革問題はどうなっていますか。高齢者の意思を参議院で代表させることも考えられますが。

藤井…動きはあることはあるのだけれど、時間がかかりますね。もしそれができないのなら一院制にすべきでしょう。二院制を残すなら参議院は比例制、衆議院は小選挙区。ねじれを解消したなんていつているが、ねじれているからいい。当たり前で存在価値がある。

堀内…ねじれを解消できるだけの説得力、使いこなせる冷静な表現能力がない。そこで力勝負になる。

藤井…民主党もすぐに「問責決議案」を出す。自民党がまねをする。だから両方ともよくない。あれは程度を越えています。

堀内…もっとお互いに自在な表現力で、相手のふところの奥まではいって議論をする。漫画世代の表現力では政治はできない。

藤井…なさけない話。

堀内…ひと昔まえまでは、政治家は一流の文化人たらしめた。文化人が政治の場に出てこない。

藤井…いいいですね。ほとんど一年生議員ですから。若い人の表現力ではむり。

◎近現代史セミナーのこと

尾崎…近現代史研究会のセミナーはいつ再開できそうですか。

藤井…臨時国会中でもやれといったのです。海江田（万里）はやってくださいという。大畠（章宏）幹事長にもいいました。これは政調とは関係がない。八年前に岡田克也が言い出した。小泉（純一郎）首相の「靖国参拝」があつて、羽田（孜）が進めた。その後、『歴史をつくるもの（上・下）』（中央公論新社刊）を出して。今度また。

堀内…今度の本の『劇場型デモクラシーの超克』（中央公論新社刊）のタイトルがむずかしい。

藤井…前のも中央公論から出した。筒井（清忠）だってそこまで使っていない。

堀内…編集者はこういうタイトルを付けたがるけれど、「超克」では読者がひろがらない。

藤井…すみません。中央公論の記者に、「超克」なんておれは知らないし使わないといったら、識者は知っているという目で見られた。セミナーの責任者を玉木（雄一郎）にするというので、これまでの三冊を読んでおくようにいつてあります。

堀内…三回目の加藤陽子さんの「歴史をどう使うか」では、国際的に孤立するな、冷静な世論をという指摘が、昭和の

歴史から学ぶこととしてありましたが、まだ終わっていません。

藤井…戦争とのかかわりでそこは大事です。加藤さんは、卒業の時期は避けたい、四月からやりますというから、二月からの国会に合わせて他の人でやります。

尾崎…NHK記者だった浅野勝人が特任講師として北京大学でお互いの「反目の連鎖を断とう」という講義をやった。

一九二四年の孫文の神戸での講演などの話をした。王道か霸道か、それに関して日中関係の反目をどう克服するか。このあたりの話はおもしろい。

藤井…孫文の演説の内容は重要ですし、浅野は知っています。議員になる前のNHK記者だったときから。ただ彼は自民党議員でしょう。どこもそうだけれど、政党の壁はある。どなたでも結構ですが登録はしてください、ということになっていて。自民党の人がきても拒否はしませんよ。

尾崎…岩見さんがはじめた原始仏教から学ぶ「北（貢一）さんの会」というのがあって、今回は亡くなって、送る会が中野サンプラザであるのですが。

藤井…そういう会なら出たいですが。岩見さんの本では満州での経験を書いた『敗戦』がいいですね。戦争は絶対にしてはいけない。が、やるなら勝て。当時はロスケといっていました。が、やったら勝たねばならない。負けた辛さを知っているんですね。岩見さんはおもしろい。おねえさんが絵を画いているいい本です。七八歳でしたか。もう少し元気でいて欲しかった。

尾崎…岩見さんとは友人の別荘を借りたりして、家族ぐるみのお付き合いでした。

◎戦争の記憶を話すこと

藤井…今度の本の話で渡辺（恒雄）さんのところへいったんですが、戦争の話になって、普通なら少佐になった人でしょう。中曽根さん、鳩山威一郎などはみんな少佐ですよ。それがいやだといって、徴兵で二等兵でいった。古参兵からお前はどこの大学だといわれて、東京大学だといったら、バーンとやられた。それを渡辺さんはいうんです。めちゃくちゃで、軍人は嫌いだという。田中角栄さんもそう。デアナ・ダービンの写真を持っていただけで殴られる。殴ることでしか組織を守れない。なさけない。敵とはやれないで味方を殴るしかない。

堀内…あとは飢えて死んだ。これは戦争とはいえない。藤井…下士官、古参兵が味方を殴る。これは戦争じゃない。戦後になってその古参兵と新宿であった。お返しをさせてもらうといつて、バーンとやった。それからお前も食えていないようだからといってごちそうしてやった。友達がいっていましたが本人でしょう。渡辺さんを嫌う人もいるけれど、おもしろい人です。ぼくはあの平和主義は好きですね。

堀内…日野原さんをはじめとして寂聴さんもそうですが、各地各界で高齢の方々がサミットをつくっていることは「平和の証」です。日本高齢社会の姿です。

藤井…渡辺さんもそうですが、戦争が終わったころの共産党の人も大事な人ですよ。

堀内…今度の本の細かいところですが、うかがいたいのは、藤井先生が「はじめに」を書いておられて、その末尾に「タイトル」についての説明が添えてあって、これは藤井さんの文脈をもっていないのです。

藤井…そうでしたか、「はじめに」には戦争の経験談を書きました。B29の話など。これに近いことを経験しているよと言われますが、言いたくないことでもあるのです。落ちた飛行機に食い物をかっぱらいにいったのですから。先生に、飛行機がおっこちたからあの中にあるビスケットを取りにいかしてください、といって。手がちぎれていたりしている。国では一般市民ですよ。兵隊の中に女性もいました。見てもへっちゃらで、ビスケットがあればいい。

尾崎…どこでしたか。

藤井…小平市。体当たりしたのです。特攻隊ではなくて、昭和二〇年二月、帝都防衛隊です。ぶつかって日本側も死んだ。飛行機はばらばらになった。胴体が割れて、ぶらぶらと落ちてきました。真上です。すぐそばですから、ビスケットがある。そういう発想しかできない。なさけない話。食料難、子どもにはそれが戦争です。

堀内…セミナーに出ていた江田（五月）さんが、「歴史を学ぶ」というのは、どこでどうすれば戦争をやめることができたかを知ることでしょうか、という質問をしていました。藤井…戦争ははじまったらやめられない。いくところまで

いつてしまう。年号を覚えることではない。勉強会はやめませんよ。

堀内…いままさにその気配がある。

藤井…それがわかつているのは年寄りだけです。

堀内…年寄りがそれを言わなければ、若い人には伝わりようがない。

尾崎…細川さんを支えている小泉さんと先生はどんな。

藤井…同じ神奈川県民ですから。あの人は飲み会には絶対にこない。おもしろい人です。ぶれることは嫌いな人です。小泉進次郎もあんならざるをえない。

尾崎…いろいろかがって、ありがとうございます。

堀内…また機会をみてお訪ねさせていただきます。

